



小田実全集（評論 第8巻）

状況から



はじめに

状況がつねに押しして来る。これは私の実感だ。そして、私は、私がもし「ベ平連」（「ベトナムに平和を！」市民連合）という名で呼ばれるベトナム反戦の運動に実際にかかわりあうことがなかったら、それほど、このことを実感として感じることはなかったにちがいないと思う。あるいは、力とお金をもつ側が、いつだって、状況を勝手につくり出して、その状況のなかに力とお金をもたない側——つまり、私の側を閉じこめようとする。その今となっては自明のこのようにして思える事実も、それほど切迫感をもって私のからだに感じとられることはなかった。実際、私は、それを、今、からだでまるごと感じとっているように思うのだ。つまり、それほど、今、状況は切迫している。

この本の最初の文章にも書いたことだが、私のこれまでの何年間、卒直に言ってしまったえば、状況に押されてのアップアップの何年間だったと思う。いつでも後手にまわって、右往左往して、そこで、まあ、何かをしたとすればしたという感じ——そういうことのありようは、これからも変えることはないだろう。いや、そういうことのありようをもつゆえに、私は私だし、私たちは私たちだという気がする。

状況を先取りするというような大言壮語はしたくない。状況を予見することはできるかも知れない。しかし、それは先取りすることではない。たとえば、アジア——最近起ったバンコックでの反日デモ、

日本商品ボイコット、ジャカルタでの反日暴動、そういうことが起るだろうことは、私と私の仲間たちは予見し、実際にそんなふうに近い、書きもした。しかし——一口に言ってしまうば、だから、どうだというのだ。

そのとき、たとえば、バンコックやジャカルタでのその地の人びとの動きに呼応して私たちの側でも何がしかの動きをかたちづくっていけば、それは、まさしく、状況を先取りしたということだ。事実は、もちろん、何も起らなかった。それゆえに、それら一連の事件は、援助も投資も、これからは現地の人間の感情を考えてやらんといかん、というぐらいのことですんだ。そして、今、力とお金をもつ側は、そんなふうな認識、あるいは、原理にもとづいて現地の力とお金をもつ側ととりむすんで、これまでに自分がやって来たことをさらに大きなかたちで行なおうとする。そういう状況をすでにかたちづくりにつつある。

いや、そもそも、経済侵略というようなのは、あれこそ、状況を彼らが先取りしたという典型のようなものではないのか。いつのまにか、私たちはそこにがんじがらめにしぼりつけられていて、私たちがそこにむきあおうとすれば、それは、まさしく、そういう自分のありようにむきあうことだ。そこにたちむかうことだ。

私がこの本のなかで、また、外で、考え、いくぶんでもその考えにもとづいて実際に行為をかたちづくろうとしていることは、そういう状況の押しつけ、そこでアップアップしている自分の姿をはつきりと認めた上で、さて、どうするか、ということだ。アジアについて言えば、私が考え、いくぶんでもしようとしているのは、たとえば、アジアで日本の経済侵略にたちむかおうとした人びとと自分

とのあいだにつながりをかたちづくることだが（その第一歩として、この六月八日から十五日まで、私は志こころざし——古風な言い方だが、そうとしか言いようがない——を同じくする人びとといっしょに、その人びとのなかには当のアジアの人びともいるのだが、「アジア人会議」を開いた。アジアで、力とお金をもつ側がつくり出す状況に対して、何とかちがう状況のありようをかたちづくらうとする人びとの集まりである）、それは、たちまち、つくり出された状況にしばらくつけられている、いや、もつとおそろしいことを言えば、あきらかにその状況の一部と化し去っている自分にどのようなようにたちむかうかということになる。私がこの本のなかで書いたことは、一語にまとめて言ってしまうれば、結局、そういうことだつたにちがいない。そして、書いたことを自分ですることが、力とお金をもつ側がつくり出す状況とちがった状況を自分でつくり出すことだろう。そういう努力だけが、おしきせでない、いわば、自まえの状況をつくり上げる。きいたふうな言い方にひびくのをおそれるが、このありようはまさしくそうしたものなのだろう。

しかし、しんどい。

そのことも、ここで、言っておきたい。何しろ、こちらには力もお金もない。あるのは、志こころざしとチエと工夫、才覚、辛抱、思いやり、やさしさ、ナミダ、笑い、負けじ魂——というようなものか。ただ、ここで、こんなことを言つて、悲壮がつているのではない。もうひとつ言えば、この作業、ほんとうにものをつくり出すということであつて、それゆえに、面白い。

しんどくて、面白い。この本にも、しんどさとともにそういう面白さが出ているといい。

この一連の文章を私は雑誌『世界』に連載のかたちで、一九七三年の一年間書いた。私のは「状況から」という題名で書いたのだが、同じ一年間、同じ雑誌に、大江健三郎は「状況へ」という題名で書き、べつに連絡しあっていたわけではないが、自然に二人のあいだで受け答えがなされている感じなのは、二人がともに状況のなかで、それを何とかしようとして生きていたからだろう。

(1974年6月21日)

目次

	はじめに	3
1	「平和」と「和平」	10
2	土建屋の前のビーチ・パラソル	31
3	青木周蔵とは誰か	52
4	「法人資本主義」の壁	81
5	最小限の礼儀	106
6	ケイダンレンにデモをしよう	130
7	「暴力団」と「ポリス」と「人びと」	153
8	「自まえの旅券」の連帯	157
9	「助ける」ということについて	182
10	旅で	200
11	英語、そして、ことばについて	206
12	旅から日本をふり返る	235

状況から

1 「平和」と「和平」

1

どうして、「平和」と言わないのか。「和平」と言うのか。もちろん、話はベトナムのことだ。つまり、どうして、「ベトナム平和」と言わないのか。「ベトナム和平」と言うのか。

新聞の見出しを見る。大きな文字で書いてあるから、べつに見ようとしなくても、いやでも眼に入る。私の視界に押し入って来る。それには、たとえば、「ベトナム和平近し」とあつて、「ベトナム和平近し」とはない。雑誌を開く。論文というか、文章というか、あるいは、ときには、宣伝文、広告文のたぐいというべきか、とにかくいろんな作文があつて、そこでは、たとえば、「ベトナム和平を阻む諸問題」だ。テレビではシカツメらしくいろんな人物が「ベトナム和平」を論じている。たいがい「ベトナム和平は私たちが久しく心から待ち望んで来たものであります」とか、「人類の悲願」であるとか、そんなことを論じてる人たちが、そして、その私たちが久しく心から待ち望んで来たもの、人類の悲願に対して何ごともまつたくなさなかつた人たちが、いや、ついでのことに言うと、いろんなことを言いたてて私たちが久しく心から待ち望んで来たもの、人類の悲願に対して何ごとかをなさうとした人たちにあれやこれやとケチをつけ、その人たちの動きを妨害し、やつつけ、ときには、ののしり、つまるところ、私たちが久しく心から待ち望んで来たもの、人類の悲願に対して

ろくでもないことしかしなかつた人たちが、彼らが口をそろえて言うのは「ベトナム和平」であつて「ベトナム平和」ではない。いや、ことは、そんな人たちだけのことではないようだ。そんな人たちだけのことなら、ここで私がムキになる必要はない。問題は——実例をあげて言つてみよう。某月某日、私はある大都市の民間放送のインタビュアーを受けた。「この人に聞く」という題名の「××放送唯一の良心的番組」というインタビュアー番組だが、これまでに放送された分の表を見せてもらつたら、なるほど、そうした自負に値するもので、「この人」というのは世の中のえらいさんばかりではない。それどころか、えらいさんのほうが数が少なくて、バイパス線建設に反対する八百屋さんが十五分かけてたつぷり話す。「減税闘争」をするサラリーマンが同じく十五分論じる。あるいは、「反戦組織」に入つた自衛官の意見（カッコつきで書いてるのは、その番組の表にあつた文句をそのまま使つてゐるからだ）。そうかと思うと、「筋ジストロフィー」と自ら闘いながら国立の研究機関設置の署名運動にほん走している」人物が話す十五分——つまり、その十五分のインタビュアーの十五分は世の中のえらいさんの十五分ではおおむねなくて、「地の塩」のような人たちの十五分で、私は表を見せられただけで、番組に出ることを承諾した。それどころか、これまでの番組のテープが欲しいものだとテープレコーダーをかついで来た番組製作者兼ぎ手の若い人物に言つた。いい感じの若者で、こうした番組を「強行」している（このカッコは私自身のカッコで、日本のテレビ、ラジオというものは、こういうところまで来てしまつてゐるのではないか）自負とさわやかにみちていて、それはこころよい。彼の訊ねる質問に鋭さはあつても、その鋭さは彼がほんとうに問題を考えることから出て来ている鋭さであつて、つまり、たとえば、ベトナムのことは彼にとつて他人事ではない。彼の世界

にくい入って来ている。

その彼が「ベトナム和平」ということばを使った。どうして、「ベトナム平和」ということばをそこで使わなかったのか。べつのところの話で、「ベトナム」が上におおいかぶさっていないときには、「和平」とは言っても、「和平」とは言わなかった。

これは彼のことではないが、ついでのことに言っておくと、「平和運動」ということばはあっても、「和平運動」ということばはない。どうしてか。

2

私はことばのことをとやかく言うたちの人間ではない。ここらで字引きをひっぱって「和平」と「平和」がどこでどうちがうのか、そんなセンサクをあれこれやってのけるつもりはまるつきりない。「市民運動」ということばが出て来ると、たちまち、「市民」とは何ぞやと論じたてる人物たちがたちあられることに世の中のありようはなっているらしいが、いつだったか、その人物たちのひとりが書きあらわしたものを読むと、「市民」の定義が十いくつかあつて、しかも、そのハクガクな定義のなかに、かんじんの市民の姿が一向に浮かび上つて来ないのであつた。

私が考えていることばのことはまことに単純なことがらであつて、そのことばを使う人間がどんな人間であるかということだ。ことばをかえて言えば、人間は生きていて、生きつづけていて、生きるということとは時間と空間のなかを動きまわるといふことなのだから、とどのつまり、いつ、どこで、なぜ、どのようにして、そのことばが発せられたか——それがかんじんカナメのことだ。

早い話、「民主主義」ということば、田中角栄さんも使っている。「人間尊重」ということば、公害企業の親方たち（ベツのことばを使って言えば、「社長」ということだ）も愛用する。いや、それは彼らがつとも愛用することばだろう。こういうことばのマヤカシ性をとらえるのに不可欠なことは、いつ、どこで、なぜ、どのようにして、そのことばが発せられたかを知ることが、ここで大事になって来るのは、もちろん、ことばの前後のつながりなのにちがいない。いつたい、どういう前後のつながりのなかにそのことばがあるか——それは大事なことで、「人間尊重」がどこかで「日本列島改造計画」とつながっているとすれば、それだけで、そのことばはマヤカシだ。ことばの前後のつながりというものは、もちろん、文章だけの問題ではない。そのことばを発した人物のものの考え方、感じ方、過去、現在のくらしのありよう、それらすべてのもろもろがそこには入っている。ふくみ込まれている。

そんなことは判りきったことだと人は言うだろう。私もそう思う。ただ、そうなら、どうして、「和平」と「平和」という二つのことばの問題——新聞、雑誌、テレビが「ベトナム和平」と言って「ベトナム平和」と言わないかという問題にもつと思いを馳せないのか。テレビでろくでもないことをとくとくとしやべりつづけているしやうがない人物たちばかりでなく、私のところにインタビューにやつて来た、あのさわやかな若者までがそこに考えをめぐらせることはなかった。

3

はじめは、「ベトナム平和」だった。誰もがそう言った。たとえば、「ベトナムに平和を！」ついで

のことに言っておくと、『ベトナムに平和を！』市民連合、つまり、「ベ平連」は「ベ平連」としてはじまったのであって、『ベトナムに平和を！』市民連合、「ベ和連」として始まったのではない。

もちろん、「ベ平連」のデモ行進に来た人たちだけが「ベトナムに平和を！」と叫んだわけではない。それどころか、「ベ平連」が始まった八年前、自民党の議員さんまでが、そう叫んでいて、「ベトナム平和」はむしろ常識だった。そのころ、「ベ平連」は「日米市民会議」という集会を東京で開き、集会のあと、私は集会の参加者数人と首相官邸に行き、当時、官房長官だった愛知揆一さんと会ったのだが、愛知さんもまた、「ベトナム平和」は自分たちも望むところと言った。

遠い昔の感じがする。まるで、百年も昔のような話だ。今どき、そうした集会の代表者が首相官邸にむかえ入れられて、政府のえらいさんに会うということなど、これはもう夢物語ではないか。そのころ、たとえば「反戦」ということは、「平和」とともにいいことばだった。自分とても「反戦」^{こころざし}の志^{こころざし}において人後に落ちるものではありませんということばを、いまは内閣の一員におさまっている人物の口から聞いたような記憶が私にはある。彼は現在ではケイサツのほうの親方をかねている人物で、ケイサツの親方として、今や、「反戦」派の若者どもを取りまれと下知しているのかも知れない。彼が実際そんなふう^{ふう}に口にしてるかどうかはさだかではないが、部下のほうの感覚ではとつくの昔にそうなっていて、今すぐにでもひっくりくるべき対象として、つまり、わる者として、「反戦」ということばが彼らの口から発せられるのを何度も私はきいた。もちろん、この場合、「反戦」ということばは、ひところ大きな力となっていた若い労働者の集団「反戦青年委員会」をさし示していることばだが、「反戦」はわる者、ならず者の集団なのだ。ケイサツの人たちばかりではない。ちまた

の人たちにも同じようなことを言い出す人たちが現われ出て来て、たとえば、次のようにその人たちは言う。「反戦」が来よりもです。あぶのうまつせ。

「平和」のほうはどうか。「ベ平連」の運動を始めて数年経ったころから「一般市民」ということが耳にし始めた。アメリカ合州国海軍の原子力航空母艦「エンタープライズ」が佐世保にやって来たときが皮切りでなかったかと思う。そのとき、佐世保では、「平和」とは何のつながりもたない人間たちの集団をさし示すことばとして、そのことばは使われていた。すくなくとも『ベトナムに平和を！』市民連合のデモ行進に加わる市民は「一般市民」ではなかった。そのときの佐世保は、そうした「一般市民」が権力のゴリ押しに怒った例だとよく言われる。たぶん、そのあたりをはじめとして、自衛隊移駐反対やら、公害反対やら、ゴミ焼き場建設反対やら、はては日照権にかかわる問題やらで、「一般市民」は動き出すのだが、それにしても、「一般市民」のもうひとつの意味のほうも残っていて、一口で言ってしまうなら、「ベトナム平和」のことなどふだんのくらしから遠い問題で、それゆえにどうでもいい人間の集団——それが、つまり、「一般市民」だ。ふだんのくらしにからませて言えば、「一般市民」とは、朝は七時に起きて、七時半に朝食をとり、満員電車でゆられて会社に行き、夕方は七時のNHKテレビのニュースを見ながら夕食を食べ、あとはテレビを見て、十時に寝るといふようなきまりを何ごとが起ころうともまもっている、まもっていないなければならない人たちで、そうしたきまりに外れた人間は「一般市民」ではない。たとえば、自分の住む市に所在する巨大な基地から戦車がベトナムの戦場にむかって出て行くことが大きな問題になっているときでも、「一般市民」はそのきまりをまもっていないなければならない。相模原市で自然発生的にでき上った「ただの市民

が戦車を止める会」の人にきいた話だが、戦車を止めようとして徹夜で坐り込みをしている人たちにむかつて機動隊員が言った。「ただの市民」がこんな夜中に起きているはずがあるものか。

4

その「一般市民」のもうひとつの意味、つまり、「ベトナム平和」のことなど「一般市民」にまったくかわりあいのないことだ、そういうものとして「一般市民」のありようはあるし、また、なくてはならないことばの意味あいがさだまって来たころからではなかつたかと思う、「ベトナム平和」に代つて「ベトナム和平」ということばが立ちあらわれて来た。もつと具体的に言うなら、パリ会談が始まったころからだつた。「平和」に代つて「和平」が出て来て、ある日、私は新聞を見ていて、オヤと思つた。それから自問した。どうして、「平和」と言わないで、「和平」と言うのか。

もつとくわしく言うと、自民党の議員さんまでが「ベトナムに平和を！」をとなえたころと、「和平交渉」がとりざたされるころまでのあいだには、「平和」も「和平」もまったく口にされなかつた一時期があつたような気がしてならない。すくなくとも、自民党の議員さんやテレビやラジオでいろんな意見をシカツメラしく述べたてる先生方が黙つていた時期があつて、そのあたりで「一般市民」ということばが出て来て、もうひとつ言うと、「反戦」ということばがわるいことばになつて来ていて、そこらの意味あい人がびとの心のなかで定着しかかつて来たところで、「和平」——「平和」から「和平」。「平和」も「和平」も、英語で言うなら「ピース」で、区別はない。だから、同じことではないか、ことさらに論じ立てることもないではないかということにもなりそうだが、それなら、なぜ、「平和」

と言いつづけけないのか。「平和」が「和平」になってしまったのか。

たぶん、何やら、居心地がわるかったのではなかったかと思う。「ベトナムに平和を！」では、それこそ「ベ平連」というような「一般市民」らしからぬ「一般市民」と似たようなことになってしまつて、それでは、ぐあいがわるい。それに気づいたところで自民党の議員さんは黙り始めて、それどころか、そんな遠い土地の話などどうでもいいことではないかと居直りを始めて、そこへ降つてわいたように「ベトナム和平交渉」が始まつた。天から落ちて来た。

ついでのことに言つておくと、そのころ、「和平交渉」が始まつただけのことで「和平」が来てしまつたように感じたむきむきが多かつたのも事実だ。パリ会談が始まるというニュースのことで、あちこちの新聞社から「ベ平連」の事務所に感想を求める電話がかかつて来たが、そのなかには、「いよいよよチョーチン行列ですか」というのまであつた。バカなことを言うな、戦争はまだつづいていないではないか、その事実のほうが重大だ、と言ひ返すと、あなた方はもつと素直になりなさい、素直に「一般市民」の気持ちに立ちかえりなさいとおせっかいなお説教までした大新聞の記者までいた。彼によれば、「一般市民」とは、「和平交渉」が始まつただけで「和平」が来たと思ひ込んで、チョーチン行列をくり出し、戦争がまだつづいていてという事実のほうには一向に眼がとどかない人間存在であるようだ。

そういう新聞記者の感覚では、新聞の紙面で、「平和」がいつのまにか「和平」にとり代わられてしまつたのも無理からぬことだつたと思う。パリ会談は「パリ平和会談」だつた。それは今でも變つていないようだが（このところ、「パリ会談」はただ「パリ会談」で「和平」の二字は落ちることが

多い)、交渉そのものは「和平交渉」で、「平和交渉」ではない。もはや、ない。

もつとも、もつとことこまかに考えてみれば、「和平」ということばでは「パリ会談」にまつわる「和平交渉」、あるいは、その結果をさし示し（たとえば、手もとの新聞を見ると「和平年越せば援助打ち切りを 共和党院内総務法案提出を示唆」というような見出しが見られる）、そこで「和平」と區別して用いられているのだという見方もなり立つが、その場合でも、どうして「和平交渉」とあくまで言いつづけないのか。「和平年越せば援助打ち切りを」と言えないこともないのだ。

5

ただ、次に述べて行くようなことからを新聞の見出しをつける人たちが考えていて、それで「和平」の代りに「和平」という文字を用いているとするなら、私はすばらしいことではないかと思う。「和平」と「和平」の文字の使いわけで、くつきりと二つの陣営のあいだに横たわるもろもろのちがい——人間のありように関する哲学のちがいまでをもふくみ込んだちがいをさし示そうとしているというなら、私はただちに脱帽したい。

つまり、「和平」のほうは、ニクソンさん、キッシンジャーさんが考えているような平和で、それは一口で言ってしまうえば、まことに身もフタもない言い方になってしまいが、力を背景にした現状維持、現在の状況の固定ということだろう。つまり、力で現在の状況を相手に押しつけるのである。のませるのである。言うことをきかない？ では、北爆全面再開だ。「和平交渉」とは、つまり、その力による状況の押しつけの努力であり、それにすぎない。「和平」がそうなら、「平和」は何だろう。

そういう強者による状況の押しつけに対して、これではたまらない、このままでは奴レイの状態ではないという考えが根本にあつて、それが状況にたちむかわせて、自分は自分なりに自分にふさわしい状況をつくり出そうとする——その努力、たたかひのはてに来るものが「和平」なのではないか。ベトナムの人たちのたたかひにそくして言えば「平和」とはそうしたもので、「平和」のそうした意味あいには、ベトナム反戦の運動が始まったころにはまだはつきりとかみとられていなかった。それで、自民党の議員さんまでが「ベトナムに平和を！」と叫んだのだが、同じことは反戦運動のデモ行進に集まつて来た人たちにも言えて、たとえば、私——デモ行進を呼びかけ、「ベ平連」の運動をかたちづくつた人間のひとりである私にも十分にそうしたことがらは判つていなかったように思う。それはいろんなことをするなかでようやく判つて来たことで、某月某日、ベトナム戦争に関する本を読んでソツゼンとさとするという筋合いのものではなかった。

「平和」と「和平」を区別するかんどころとして、前者には「反戦」が分かちがたく結びついて来たという事情があるようにも思う。そこには、今はもうはやりのようになつてしまった、加害者である自分の位置の確認ということも結びついて来て、その自覚が運動の新しい根となつて、そこまでことが動けば、まづ正面から権力と対することにもなつて、とどのつまり、「反戦」はわるいことばになる。そして、そういう「反戦」にかかずりあわない人びとは「一般市民」となつて、善良な「一般市民」が「加害者」であるはずがあるものかということにもなる。そんなふうなことのありよりの移りかわりは、私はこれまで何度か書いて来たことだし、多くの人びとが論じて来たことなので、ここではもう少しべつの角度から私たち自身のことからにからめて問題を考えてみたい。それは、状況の押し

つけ、押しつけられた側から言えば、状況の押しつけられということだ。押しつけ、押しつけられる関係を私たちにさし示したのがベトナム戦争で、その示し方はきわめてはっきりとしたさし示し方で、おかげで、世の中の戦争以外のことがらについても、二つのものの関係はいやでも眼に見えて来た。

6

世の中、力のある側が勝つというのは、力のある側が状況を勝手に作り出せるということだろう。力の中身はいろいろあつて、権力、軍事力、金力などがたちどころに頭に浮かんで来るが、政治の世界では、まず、そんなところが力をかたちづくる。これをひとつの社会にあてはめて言えば、権力をもつ人間たちが状況をつくり出すということだが、話を世界にひろげて言えば、状況をつくり出すのは、いつでも、強国、あるいは、大国というわけだ。ところで、ここで問題になるのは、権力をもつ人間ともたない人間との区分けで、それは国と国とのあいだの話にひきつけて言えば、何が大国で何が小国かということになるが、このやつかいしごくな問題は、逆に考えて行つたほうがはっきりする。つまり、状況を先に手前勝手につくり出していく側が権力者で、話をこんなふうにもつて行けば、アメリカ合州国が世界の権力者であり、日本国がアジアでのそれになりたがつている、いや、すでになりつつあるということの次第もあきらかになるにちがいない。

もつとも私はここで、そうした区分けの問題に深入りするつもりはない。私が述べたいのはもちろん区分けの問題にからむことがらだが、状況をつくり出されてしまった、それを押しつけられた側の反応のことで、ここで、私はまず、そうした反応の特徴をいくつか考えてみたいと思う。

と言つても私が述べたいのは単純素朴なことからで、まず、その反応は、いつだつて、後手にまわるというかたちで出て来るということだ。そこから、他のいろんな反応の特徴が出て来て、たとえば、あわてふためく。現実にくしくしたことになる。いやでも大地に根が生える。くねくねと曲る。ウヨ曲折。スッキリといかない。ねばり強い。そうならざるをえない。柔軟。それでいて、一本、シンが通る。硬直しない。……

後手にまわるというのは、あたりまえのことだ。力のあるやつが状況を先に手前勝手につくり出して、押しつけて来るのだから、後手にまわるのは力のない者にとっては当然しごくのことなのにちがいない。「状況から」というこの本の私の文章の通しの題名にからめて言えば、「状況から」押しつけて来るのであつて、そういう状況をまえにして、押しかけられた側はどうしたつて後手にまわる。「状況を先取りする」というような名文句がある。前衛派の会合に出かけて行くと、必ず耳にする名文句だが、私の考えでは、これほど言うはやすく行なうは難しのたぐいのことがらはない。そんなことがやすやすとできるのは力のある側であつて、そして、もうひとつ言うなら、そんなことをたやす口にできるのはほんとうに状況にむきあつていないからで、力のない人間のひとりである、状況になんとかまともにむきあおうとする人間のひとりである私にはとうていできない。そういう人間の寄り集まりである「ベ平連」のような運動をつづけて来たことなかで私が獲得したのは、大げさな言い方になるが、そういう認識だつた。まずもつて後手にまわるのは当然だ。それはしようがないことではないか。無理に状況を先取りしようなどと思わないほうがいい。そこから無理が来る。あるいは、先取りしたような錯覚にかられる。

後手にまわっているのだから、あたふたとあわてふためくのはあたりまえである。これは人間だから当然のことだ。たとえば、デモ隊と機動隊との対決というようなシユラ場で、落ちついているのは機動隊のほうである。これも考えてみればしごくもつともなことで、機動隊のほうはそういうシユラ場をつくり出す側で、シユラ場専門に訓練を重ねて来ているのだ。デモ隊がそちらのほうで後手にまわるのはあたりまえで、しかるがゆえに、うろたえもすれば、あわてふためきもする。こういうシユラ場のあとで、あれはああすべきであつたとかこうすべきであつたとか、さまざまに論じてる人物が出て来るものだが、たいていの場合、ふしぎなことに、そういう人物はシユラ場の現場にはいないのである。私はいつだつたか、いくさの体験者という人からシユラ場のことのありようについて叱られ、おまえの「指揮」はなつとらんと言われたことがあるのだが（ことわつておくが、私はデモ隊を「指揮」したおぼえはない）、批判は的を得ていたので、それでは今度のデモ行進はあなたが指揮して下さいとたのむと、いや、今度の土曜日は女房の実家へ行かなければならんから残念ながら、とあつさり逃げられた。

状況はつくられてしまっているのだから、いやでも状況にそくしてもの考えるようになる。これもまた、しごく当然のことだ。状況から出発するよりしようがないのである。もう一度、私の文章の通しの題名から改めて言えば、「状況から」押しかけて来たのだから、そして、事実、こちらの側はそちらに押しかけられているのだから、いやでも、「状況から」ことを始めるよりほかに術がない。

力のある側なら、状況と無縁のところ、大理念とやらをふりかざして、状況をその大理念にしたがえさせ、つくり変えて行くことができるにちがいない。早い話、「日本列島改造計画」というもの

がそうだろう。そこにどんな大理想があるか、そのところはすこぶるあやしいが、あきらかなことは、みごとにあらさまに示されたことは、力のある側には何でもできる、すくなくとも、そんなふうなものとして状況に対して行けることなのにはちがいない。

私たちの側はどうか。いやでも、「状況から」ことを始めるよりしよがないだろう。後手にまわることもあれば、あわてふためくこともある。そして、「状況から」出発するとなると、たとえば、状況にふりまわされている自分自身の無力、無知、おろかさ、仕方のなさにむきあうことにもなる。そこで、自分の、無力、無知、おろかさ、仕方のなさをいたずらにいきどおってみてもしよがない。いかに無力で、無知で、おろかで、仕方のないものであろうと、手持ちのものはその状況にふりまわされている自分以外にはないのだ。援軍はどこからも来はしない。

大地に根が生えるものになるだろう。それでしかありようがないのである。スツキリとはいかないし、くねくねと曲るだろうし、柔軟にもなるだろうし、そして、それでいて、一本、筋も通れば、ねばっこい強さにもみちたものになる。と書くと、なんだかみごとなことのあるようだが、そんなふうなものとして以外ことのありようはないと言ったほうが正確だろう。つまり、つづいている以上は、つづくものとして世の中に存在している以上は、そうしたものだ。そうしたものでないと、とつくの昔に消え去ってしまったている。

状況にふりまわされるといふことがなんとしてでもあつて、私はこれは卒直に認めておきたいが、言いかえてみれば、運動は状況によつて大きくもなれば小さくもなる。いや、これは寄せては返す波のごとく、と言いたい。そうなつて来れば運動はかなり成功したものになつていて、時いたれば、波

は堅固な岸壁を打ちくだいたりする。

7

もうひとつ、べつのことを考えてみよう。力のない側が状況に對しようとするときには、どうあつても具体的になるといふことだ。ほんとうのところは、力のある側にとつても事情は同じで、「状況から」押しかけて来るときでも、こまかく見て行けば、状況が個々の具体的な問題をふりかざして押しかけて来ているのだが、力のある側はそれこそ力があつて、ありあまつていて、あんまりあちこちで問題をふりかざして押しかけて来るものだから、とどのつまり、力のない側は次のようにでも不安げにつぶやくよりほかにない。全般的に状況がわるくなつたな。さきゆき、この日本、どないなりますねんやろ。

具体的なはつきりした問題から始まつた運動でも同じことだ。××会社の××工場の公害に反對することから始まつた運動（さつきから使つてゐる言い方をすれば、これは××会社の××工場が押しつけて来る状況にむきあおうとする運動だ）が、これは××工場だけの問題ではない、となりの市の□□工場の問題でもある、いや、△△工場の問題でもあるということになつて、いやでも運動は範囲をひろげる。それどころか、こうした公害を生み出す会社とはいつたい何かということにまでまさしく自然に問題の追究は深まつても行けばひろまつても行き、あげくのはて、運動は状況全体にむきあつてゐる。そこまで行きつくほかはない。

ここで困つたことになるのは、運動が範囲をひろげすぎて、キハクにもなれば、かえつて弱くもな

ることだ。言いかえれば、何でも屋になってしまふ。この事情は国の別をこえて存在するものらしくて、イギリスの活動家がうまいことを言った。活動家といつても二十そこそこのかわいい女の子で、彼女はしゃれたベレー帽をかぶつていて、そいつを頭の上でぐるぐるまわし、かたちをかえてみせながら、「今日はベトナム、明日はビアフラ」。まるで、新撰組だ。

この女の子をわらうのは簡単だが、実際、たとえば、小さな都会などで状況にいつたんだちむかおうとすると、えてして何でも屋になってしまふのである。先方様は分業で問題を押しつけて来るのに、こちらはひとりでそれにたちむかう。いや、それらにたちむかう。くたびれもすれば、何がだか判らなくもなつて来る。

こういう何が何だか判らなくなる状況の到来を防ぐには、あくまで、具体的なひとつの問題を運動の根にすえることだ。これは私自身の自戒のことばだが、これだつて、おとし穴がなくはない。今度は具体的な問題の内部にあまりにも深く入り込んでしまつて、外が見えなくなる。へんに専門家になる。つまり、「通」になる。硬直する。官僚的になる。

どちらにしたつてろくなことはない。しかし、そのろくでもないことのありように、力のない側は直面せざるを得ない。言いかえれば、この状況のあいだを運動——いや、運動をかたちづくるひとりひとりの人間はゆれ動いていて、それ自体が力のある側によつて押しつけられた状況なのだ。

どうしてこんなことになるのか。事情は簡単で、状況をかたちづくるものは個々の問題で、状況にたちむかおうとすればそのひとつひとつの具体的な問題と切りむすぶよりほかにはないが、力のある側が無限に問題をくり出し、それを勝手に結びつけて行く（その作業が、とりもなおさず、状況をか

たちづくるということだ）力をもっているからだ。

少し極端な言い方になるが、早い話、私たちは日本のアジア経済侵略全般にたちむかうことはできない。日本のアジア経済侵略を弾ガイする文章はいくらも新聞、雑誌に出るが、それだけのことでは、企業は何とも思わないにちがいない。ある特定の会社の特定の工場がアジアのどこでどうしているのか——そこまで問題がこまかになつて行けば、そこではじめて、状況にたちむかう手だてを私たちは得たことになる。公害一般を弾ガイすることなら、企業自身がやつてのけることだろう。公害は日本中にひろがる問題でありながら、あくまで、ある特定の企業、特定の工場の問題なのだ。こうした状況の「二面性」がことのありようをむつかしくする。現状にたちむかうということ、それは、すなわち、その「二面性」に直面するということだ。

いきおい運動はくねくね曲り、ウヨ曲折する。運動をかたちづくる人間も、もちろん、そうだ。

8

こうした運動のことを「市民運動」というこのごろはやりのことばを使つて言いあらわしてもよいが、何やら手あかにまみれた感じがするので、「人びとの運動」というふうに呼んでおこう。状況を手前勝手にかたちづくつたり先取りしたりすることができない人たちが、私の言う「人びと」で、「人びと」が集まつて状況にたちむかおうとすれば、それが、すなわち、「人びとの運動」だ。このところ、そうとしか呼びようがない運動が日本は言うまでもなく世界にふえて来ているのは事実で、たとえば、現在の段階での北アイルランドのカトリック系の人たちの抵抗運動、あるいは、インドネシアの内部

での反スハルトの運動、そして、オーストラリアの土着の黒人たちの運動など、私にはそうとしか名づけようがない。北アイルランドの運動について言えば、それは宗教運動ではもはやないし、ナショナリズムの運動の範囲もこえてしまっている。と言つて、明確に革命運動でもない。あとの二つにも同じことは言えて、昔ふうの考え方では、そんな定義しがたい運動はアワのように消え去るところで息を吹き返して、とどのつまり、寄せては返す波で、確実なことは、それでも岸壁に少しずつ穴をうがつていることだ。

一九七三年の八月から四か月ほど、私は南太平洋の島々からオーストラリア、東南アジアのあたりをぐるぐるまわつて、ついでのことに（とは突拍子もない言い方になるが）北アイルランドまで出てみたのだが、こういう寄せては返す波はかなりたしかなありどころを示すものとしてあるように見えた。ことにその感じが深いのは、十二年前にアジアを旅して歩いたときには、そうした押しかけて来た状況にたちむかう人びとの運動がなかったからだろう。そのころ、アジアの新興国は「A A連帯」というようなことばにいくぶん浮かれて、状況をつくり出し、先取りする力が自分にすでにそなわっているものとして自分を過信していたのではなかったかと思う。そうした政治の姿勢をじかに反映して、そこにあつたのは、派手な言説でにぎやかにかざりたてたさまざまな「A A連帯」の集会ではあつても、押しかけて来た状況に根ざした運動ではなかったような気がする。北アイルランドがそのころどうであつたかは知るよしもないが、ことアジアにかけては、私にはそんな実感がある。派手な言説は西洋帝国主義の侵略を弾ガイしながらも、その言説だけで西洋帝国主義をすでにやつつけて、

状況を先取りしてしまったような錯覚におちいらせることがあって、どこかで具体的な個々の問題にとりくむことをおこたらせたのではないか。ほんとうのところは、アジアは、まだまだ、状況を手前勝手につくり出す力をもつてはいなかったのだ。

9

十二年のあいだにどれだけの変化が起つたのか、ことを状況をつくり出す力のある側にかぎって言えば、大して変りはないもののように思える。もちろん、こんなことを言い出せば、中国のことを論じ始める人がいるにちがいないが、私はここで、「二極分解」とか「三極分解」とか、そんな判りきつた議論をやり出すつもりはない。「第三世界」の側に立つことを公言し（ということは、世界の力のない人びとの側に立つこととする）と、実際にそうした努力を折にふれてしている中国でさえ、状況をつくり出す力のある側にむきあうとき、ときとして、力のある側と同じ姿勢を示すことがあって、これは「力の政治」の信奉者たちをよろこばせる。

ただ、問題は、状況を強制される側のことだろう。そこで、ことのありようは徐々にはあろうが変つて来ているように見えて、そこで、私はベトナム戦争、いや、ベトナムの人たちのたたかひの強烈で重いかげを読みとるので。そのたたかひは、一口に言つてしまえば、力のある側によって強制された状況をはね返す運動だろう。そして、そのはね返す運動によって、逆に、力のある側の状況さえゆり動かす。

ベトナムの人びとのたたかひの意味をただそこにだけ限定させるのはまちがっているにちがいない

し、私にもそのつもりはない。そこには、革命への意志もあれば、ナシヨナリズムも大きな力として働いているにちがいないが、私自身にひきつけて言えば、また私自身が生まれ、育ち、げんに今もそこで生きつづけている日本の社会の状況にひきつけて言えば、私にとつて、ベトナムの人びとのたたかいがもつとも大きな意味あいは、それが状況を強制された人たちのたたかいであるということだ。私流の言い方をすれば、「人びとのたたかい」であるということ——そこで、私はベトナムの人びとのたたかいとじかにつながる自分を感じる。

10

ここで話を「平和」と「和平」に戻す。すでに私がこの二つのことばにからめて言いたかったことはお判りではないかと思う。ベトナム戦争というのは、実は、「平和」と「和平」の二つのものたたかいではなかったのかということ——そこまで話をもつて来れば、たとえば、さきに述べた民間放送の「良心的番組」の製作者兼ききの若者が使った「ベトナム和平」ということばは気にかかる。なるほど、キッシンジャーさんなら、パリ会談にのぞむ彼の心のうちにあるものは「ベトナム和平」であり、それを実現させるための手だてとして「和平交渉」があるにちがいない。しかし、ベトナムの人びとが待ち望んでいるものは「平和」で、その「平和」と「和平」が切りむすぶひとつの場がパリ会談なのだ。つまり、ベトナムの人びとに心をかたむけてものごとをとらえるなら、そこから自然に出て来ることばは「和平交渉」であつて「和平交渉」ではない。

私がおそれるのは、自分でも警戒したいと思うのは、このありようをいつのまにか「和平交渉」、

あるいは、「和平」ということばにのりかかって眺め始めることだ。そこから、まだ停戦もできていないのに平和が来たように感じ始めることも生じて来れば、あるいはまた、ベトナムの人びとがとりくんでいる「平和交渉」（「和平交渉」ではない。念のため）を、あんなものはまったくのキッシンジャーのマヤカシにすぎないと切り捨てて考えることだろう。そこから、アメリカ合州国を停戦調印にまで追いつめようとするベトナムの人びとの地道な努力を、そこにまったく助けの手をさしのべないまま、まるで他人事のように眺めてしまう心理も出て来るにちがいない。そして、これはもう言うまでもないことだが、「和平交渉」、「和平」ということばにのりかかって、世界のことのありよう、日本のこのありようをキッシンジャーさんばりの力の眼で眺め始める——その危険を私たち、いや、私自身ももつていて、いったん、そんなふうな眼でものごとを見始めれば、「人びとのたたかい」、「人びとの運動」の姿は視界のなかに正確にとらえられるはずはないのだ。

それにしても、どうして「和平」と言うのか。「平和」と言わないのか。

2 土建屋の前のビーチ・パラソル

1

人間、えらくなると、勝手にそんなふうに思い込むと、建物をたてたがるものだ。それも、できかぎり、ばかでないもの、地のはてにまでひろがるもの、天にまでとどけというもの、そうしたたぐいのものをたてる。たてたがる。

ことにその人間が権力者だということになると、権力という途方もないものを日夜手玉にとつていけるせいか、たいへんなことになる。人の世のことはすべてわが思うままと信じ込んでいるゆえに巨大な建物をたてることで自然に抗しようというのか、わが威令の及ばぬ他国と力をきそおうとするのか、歴史にわが「偉業」を建物のかたちで残すつもりになっているのか、あるいは、建物をたてることあたわぬ世の凡百、凡万、凡千万の人びとにわが偉大、強大を誇示しようとしているのか、そこへもつてきて、サイフはその人びとまかせだ、そこから無限にしばらくとればいいというわけで、とどのつまり、万里の長城をたて、バベルの塔をたてる。昔の話のことだと言わないでいただきたい。全国あまねくひろがる新幹線の網の目も万里の長城の現代版くさいし、あちこちにニョキニョキ突立つ高層ビルも、赤白ダンダラ縞の原子力発電所の煙突もそのうちバベルの塔のごとく崩れ落ちるのではないか。古今東西の歴史を眺めまわしてみると、私には権力者の大半はつまるところ土建屋であったと結

論してきしつかえない気持がして来るのだが、そんなふうを考えれば、わが田中何某氏など、そのきわめてあからさまな一例にすぎないということになる。

ただ、彼はいかにも小物だ。小物権力者は、まず、自分及び親族、ケイ族の家屋敷のたぐいをたてる。それを強大無比のものとする。しかし、いくら小物であろうと権力者は権力者で、そこらがこわいところで、家屋敷の改造計画では満足しきれないことになって、わが威令の及ぶ全国土の改造計画にのり出し始める。こういう「列島改造計画」のたぐいも私の言う建物なのだが、このことばを耳にするたびに私の心に浮かび上つて来る奇怪な図柄の幻想があつて、それは、深夜、草木も眠るウシミツどき、わが小物権力者が粘土でこね上げられた列島の実物模型のあちこちをたたき上げの土建屋にふさわしいたくましい指でおしてへこましたり、のぼしたり、ときには、エイ邪魔じゃ、ここらあたりはいらんなど一氣にねじりつつたりしている図柄の幻想なのだ。まことに無邪気な図柄で、わが小物権力者はまさしく子供のようになその作業に無心に熱中しているのだが、さて、その彼にむかつて奥さん、あるいは、お母さんは何と言うか。案外、次のようなことばを言っているのではないか。××ちゃん、もうそんなでんごはやめて、早う寝なはれ。あんまりでんごすると、オモチャがつぶれてしまいますがな。

建物というオモチャをもてあそぶ小物権力者の典型がわが田中何某氏だとすれば、大物のその筆頭を誰をおいてもまず万里の長城をつくった秦の始皇帝のごとき大人物だろうが、そこまで話をさかのぼらせてしまえば、いささか現実味がうすれる。そこで、ガイセン門を末永き「フランスの栄光」のためにおつたて、シャンゼリゼを後世の日本の観光＝買物客のために残した思慮深きナポレオン三

世あたりから考えることにしたいが、彼の功績は彼以後の全世界の権力者の建築観、あるいは、オモチャ観をガイセン門とシャンゼリゼの二つに収レンさせたことにあるにちがいない。彼以後、どこかの国の権力者が、どうもわしの国の首府のさまはなつていやらん、小さい汚ないし、これは国の恥じゃ、国の恥すなわちわしの恥じゃと考え始めて、首府の改造計画にのり出したり、いつそ新しくたててやれということになると、たちまち立ちあらわれるのはナポレオン三世の亡霊であつて、つまりは、ガイセン門とシャンゼリゼだ。それら二つのもののまがいものをおつたて、つくろうとする。ほんとうに私は、世界のあちこちで、何度、この二つの亡霊たちに出会つたことか。改造計画、あるいは、その実現体の中心に突つ立つのは、まず、いずこの国とのたたかいの結果とも知れぬガイセン門のイミテーションでなかつたら巨大な戦勝記念碑のたぐいで（いまだかつてお目にかかつたことがないのが、退却門と戦敗記念碑だ）首府の中心にそれだけの高さで大ききものが直立するとなると、そこから権力者がのぼしたくなる、それもわが帝国のすみずみにまで至れと放射線状に四方八方にのぼしたくなるのはシャンゼリゼであるのことはきまつている。シャンゼリゼとは、要するに、ガイセン門の行事のあと、軍隊がエツ兵式の行進をすることができるようなひろがりをもつた街路のことだが、そこにいつでもほんもののパリのシャンゼリゼのようにきらびやかな商店が軒を並べるということはなかなか事態はならなくて、これは新興国の「計画首府」の例によく見られることだが、草ボウボウのシャンゼリゼになろうと、その目ぬきの大通りにハダシのコジキがウヨウヨしていようと、権力者はシャンゼリゼをつくる。いや、これは逆に言つて、つくるから、たぶん、権力者なのである。大物のそれなのである。

もつとも、これは何も権力者——大物権力者にかぎられたことでも、一国の首府にかぎられたことでもないのかも知れない。このあいだも新聞を見てみると、「デイスカバー・ジャパン」の花形のあつる地方都会の都市計画のことが話題になつていて、新聞記者が計画の作製者である高名な建築家にむかつて、ところで、やはり、こういう計画となると、欲しいのはガイセン門とシャンゼリゼですわねというふうなことを訊く。その質問に建築家もわが意を得たようにうなずき、わが計画にはすでにそれから二つのものはおり込み済みである、小さな都会のことだからそのかたちのままというわけにはいかないが、いわば、二つのもののいぶぎというようなのはとり入れてあるとのたまうのだが、ほんとうにその新聞記者といい建築家といい、どこの国とのどこでのいくさからガイセンして来たのか。二人の観兵式はシャンゼリゼを通つてどこへおもむこうとするのか。

パリのものの何倍もの大きさのガイセン門をおつたてようとしたのがヒトラーである。ヒトラーがはたして大物権力者であるのかどうか、あれは真実のところは小心ヨクヨクとした小人物であつたといふのが最近の定評だが、そんなことを言い出せばナポレオン三世氏も同じような小人物であつて、つまるところ、権力者というものはたいていそうだ。そこでこまかなセンギだてはやめにしたいが、私の見るところ、彼が実際に殺した人間の数と彼が夢みたガイセン門の大きさにおいて、ヒトラーはまさしく大物権力者なのにならぬ。いや、もうひとつつけ加えておけば、ガイセン門がパリのそれの何倍もの大きさのものとすれば、彼が「戦後」のベルリンに夢みたシャンゼリゼもばかでないものであつて、その点でも、ヒトラーは大物権力者であつた。

ヒトラーの建物好きについては、彼のお気に入り建築家シュペーアが自伝『第三帝国の内側で』

のなかでくわしく述べている。シュペーアはいくきの末期には軍需大臣に任命されたやり手で、ナチ・ドイツの最後のたたかいをともかくにも支えたと評される人物だが、その巨大きわまるガイセン門、シャンゼリゼは、ヒトラーの指示にしたがって彼が「戦後」のベルリン改造計画の中心にすえたものだった。私がついているシュペーアの自伝は英訳本だが、なかに幾枚もその改造計画の模型の写真が入っていて、どの写真にも模型を熱心にみつめる大物権力者の姿があつた。とにかく、ヒトラーの建物好きは権力者Ⅱ土建屋列伝のなかでも群を抜いていて、どんなに機嫌のわるいときでもその改造計画の話をつればたちまち上機嫌になつたということだ。占領直後のパリに半ばおしのびでわずか半日の旅行を試みたときにも、彼の見たものはオペラ座をはじめとしてただ建物であつた。もちろん、そのときにもパリには人間はいて、生きていて、さまざまなくらしをそっくりひろげていたにちがいないが、しよせん、パリとは、彼にとつてガイセン門とシャンゼリゼであつて、人間ではなかつた。

2

「列島改造計画」とはうまく名づけたものだと思う。つまり、そこには人間のおいがしないからだ。「列島」とは、つまるどころ、土地で、いかにも土建屋としての権力者にふさわしい発想だが、これが「日本改造計画」ということになる。土地の上の人びとのくらしというものがたちまちからみついて来て、スツキリとはいかない。いや、それどころか、北一輝さんの著作ではないが、革命だとかクーデターとか、そんなおどろおどろしげなものまでもそのことばは暗示して、ことはとにかくやこしいのだ。そこへ行くと「列島改造計画」はよろしい。あくまで改造は土地だけの問題だという気がして

来て、そうなれば、しよせん、穴を掘ったり、埋め立てをしたり、ついでのことに不要なところは削つて、工場であれ、高速道路であれ、空港であれ、建物をたてる。人間がどこかに住んでいる？ よろしい、金を払つて、立ち退きさせてしまえ。

「列島改造計画」がいつごろから、わが土建屋＝権力者の頭のなかに根づき始めたのか私はつまびらかにしないが、日本のことをウンヌンするのに「日本列島」というようなことばが使われ始めたのは、やはり、万国博の計画が実際の問題として論じられ始めたときのことでないかと思う。思えば、あの万国博というもの、あれは、つまるところ、土建屋＝権力者の発想の上になぎずかれた建物——建物群で、そのころに「列島」ということばがやはり始めたのはまったく無理のないことだったにちがいない。万国博のキモいりみたいな格で発言していた高名な若手建築家の発言のなかに、万国博に投じられる費用のことを弁じて、カクカクシカジカのお金は巨額のように見えるが、日本列島の未来の実験だと思えば高くはないというような理屈があった。その理屈を今でも私がよくおぼえているのは、そこで、彼が「日本列島の未来」とは言つても、「日本の未来」とは言わなかったからだろう。まして、「日本の未来」ではなかった。列島に住み、くらしをたてる人間の未来のことではなかった。

それに、「日本列島」というようなことばを使えば、それは、もう、外部のどの世界とも切れて、自分は自分だけで存在している、そのありようこそが列島の列島であるユエンだというような感じがして来て、そこからは、たとえば、日本がアジアの一国である、一国にすぎないというものの考え方、感じ方は出て来ないような気がしてならない。「日本」と言えば、「日本の未来」と言えば、いやでも、たとえば、国際政治のややこしい渦巻のなかにからみとられた日本のありようのことが頭に浮かんで

来て、ここでもまたきれいなサッパリといかない。つまり、つながっているのである。アメリカ合州国ともヨーロッパともつながれば、ソ連、中国ともつながる。そこらあたりのつながりは、このごろではようやく中国とのつながりをふくめて、誰の頭にも、土建屋〓権力者の頭にも浮かんで来ることだが、ベトナムとのつながりとなるとどうか。ベトナムとのつながりについて「日本の未来」を考えると、ということには土建屋〓権力者の頭は言うまでもなく、いたいの日本人の頭はまだまだなっていないらしくて、ベトナムは、ベトナムの人びとのあのたたかいたのあとでも、たかだか、かわいそうな目にあっている小国、「ポスト・ベトナム」ということばで象徴される、つまり、「援助」という名の商売の相手国としてのアジアのおくれた一国にしかすぎないにちがいない。

ただ、それでも、「日本の未来」と言えば、私たちはそれをベトナムに重ねて考えることができるような気がする。いや、たんに考えるばかりでなく、実際、私たちの努力——というよりたたかいて通してそれをそこに重ねあわせてつくり出して行くことができる。すくなくとも、そうした可能性をもつものとして考えることができるが、「日本列島の未来」となると、どうか。私には、それは、ベトナムとどのようにしても重ねられないものに思えて仕方がない。「日本列島の未来」が指示しているものはアジアの「経済大国」としての未来であって、そういう未来の「日本列島」はベトナム——ベトナムの人びとのたたかいたから何ももの学ぶことのなかった日本なのだ。

3

先進国の——いや、何をもつてして「先進国」と言えるのかということに議論がなつてしまいそう

なので、「建物先進国」もしくは、「土建先進国」というぐあいにことばを規定しておきたいが、その「建物先進国」、「土建先進国」では、すでにたいがい建物はでき上っている。たとえば、パリだが、すでにしてガイセン門もあればシャンゼリゼもあり、二つをとりまく建物もその高さまで規定されてでき上っていて、大物権力者ドゴールさんが立ちあらわれたところで、たかだか、まっくろに歴史だかホコリだかスモッグだかに汚れた建物の壁を白くきれいにするだけのことができたにすぎない。そこへ行くと、東京などは土建屋⇨権力者がズイキの涙をこぼしそうな首府だが、それにしても、新しいビルをたてるためには古いビルをこわし、土地の値だんがむやみと高くて、せつかくの高速道路がクネクネと曲ってしまうというようなくあいのわるいところがある。その点、土建屋としての権力者の姿がもつともくつきりと見えて来るのは、どのようにも未来を描き出すことができる「発展途上の国」においてであるようだ。私の見るところ、「発展途上の国」というのはたいがい「建築途上の国」という名で呼んだほうがいいほど、権力者は土建屋としての仕事に精を出して来たし、今もまだ精を出しつつある。と言うと、とたんに人びとがあざやかなイメージをとまなつて思い浮かべるのは、たとえば、ブラジルのブラジリアというような巨大な土建屋の実験地のような首府だが、そこまで話を遠いところにもつて行かなくてもよろしい。私たちにもつと近いアジアにもそうした建築途上の首府の例はいくつもあつて、フィリッピンのケソン・シティもそうなら、マレーシアのクアラルンプール、インドネシアのジャカルタ、あるいは、大規模な工業団地、ことばをかえて言えば、公害の大発生源の造成を必死のいきおいで行なっているシンガポールもそうしたもののなにちがいない。

「発展途上の国」で、土建屋としての権力者、あるいは、土建業としての政治の姿がくつきりと見え

て来るのは、ひとつには、立派な建物が立っているところとそうでないところのちがいがあまりにも明瞭に見えて来るからかも知れない。つまり、草ボーボーの大地にポツネンと丈高い建物がたつのである。巨大な記念碑のまわりにいつのまにか水たまりができて、そこでカエルがなっているのである。あるいは、ゴーカケンランの宮殿のすぐ横手をハダシのコジキが歩いている。ここに並べたのはべつに比喻ではない。いずれも、実際に私がアジアの「発展途上の国」の首府で最近に目撃した事例なのだ。場所を明記しておけば、ケソン・シティとジャカルタ。三つの事例がどちらにおいても見られた。

もちろん、草ボーボーの大地に丈高い建物がたつことも、巨大な記念碑のまわりでカエルがなくことも、あるいは、宮殿の横手をコジキが歩くことも、美学的に見てわるい風景ではない。私はむしろそうした風景を美しいと見、愛するのだが、それにしても困るのは、不便なことだ。やけにだだっ広くて、どこへ行くにも車がいる感じだが、さてその車を手に入れるには先立つものがある。だだっ広いのは道路も同じで、そこを渡ろうとすると、これはもうひと仕事で、身体障害者ならあきらめてしまいたくなるだろう。

と書き出すと、国家百年の計を考えて、そうした広さをもつ都会をかたちづくり、道路をつくっているのじゃという声がかきこえて来そうだが、ここで、すぐ、ことばを返すことができる。いったい全体、どのような国家百年の計なのか。また、誰にとつてのそれなのか。そもそも、その百年の計とやらになかに、国家をかたちづくっているはずの人間が入っているのか。

ジャカルタはたいへんなところだった。何がたいへんなのかというと、まず、だだっ広くて、ひとつの地点から他の地点への移動がたいへんであった。そこへもつて来て、巨大な記念碑がおった

ところからシャンゼリゼまがいの道路（ただし、草ボーボーのシャンゼリゼである）が放射線状に四方に出ているものだから、車にのつても大まわりして走る。いや、そんなことは車にのれる幸運な人間だけの問題でいいとしても、その草ボーボーのシャンゼリゼ道路を横切るのがまさしく至難の業であつた。首府の非人間的なまでの広さのなかで快適にくらすためには車を手に入れる必要があり、車を手に入れるためにはまずもつて先立つものがあるわけだが、ジャカルタにはなかなかどうして先立つものをどこからかもつて来る人たちが多くと見えて、裏通りはいざ知らず、目抜き道のシャンゼリゼとなると、車は切れ目なく流れに流れ、しかも、その車の流れは、たいへん急流なのだ。こういう急流を安全に横切るためには信号灯という足がかりの岩場や歩道橋という丸太橋（歩道橋という車のためをひたすらはかり、人間をばかにした奇妙な発明物は、たとえて言ってみれば、急流にあぶなつかしくかけられた丸太橋みたいなものではないか）が必要なのにちがいないが、信号灯も歩道橋も、一キロも歩いてやつとというぐあいにはいかないのである。とどのつまり、急流にからだを突き入れ、呼吸をととのえ、ころあいを見はからつて一気に走る。私はジャカルタで何度そんなふうにして走つたことか。私が走るとき、まわりを見まわすと、敗戦後の日本の焼跡でよく見かけたモク拾いめいたハダシのオッサン、同じくそのころのかつぎ屋めいたズダ袋をかつぐオバハンたちもいつしよに走つていて、渡り終えたところで、私も彼らも息をつく。ジャカルタというと私はまずそんなことを思い出すのだが、ジャカルタのことを書いた日本人の文章にそうしたがらがまつたくと言つていいほど出て来ないのは、文章の書き手たちが「ホテル・インドネシア」というようなガイセン門的巨近代ホテルに泊まり、ジャカルタ・シャンゼリゼを車でいつも突つ走つていたからか。ジャカルタの大使

館員や商社員、あるいは、その家族などは決して街を歩いたりはしないという話をきいたことがある。

そして、もちろん、その大使館員とカクテル・パーティーなどで出会ってニコニコし、商社員のほうからはワイロをたんまりもらってくらしている政府のえらいさんたち（の月給は、六万円ぐらいにしかならないそうだが、ジャカルタに活動の本拠をおく日本の商社、企業は、一社がひとりあて月に三十万円は手わたしているにちがいないというのがジャカルタの消息通の意見だった）は車にいつものついで、したがって、いささか車が多すぎるくらいはすでに出て来ているが、ジャカルタ・シャンゼリゼはただひたすらにすばらしい道路だということになるにちがいない。シャンゼリゼがすばらければ、行手にそびえる記念碑もまたすばらしいもので、こういう点になると、スカルノ氏もスハルト氏もまったくちがいはないものらしい。スカルノ氏が記念碑をたて、シャンゼリゼをつくるなら、こちらは「デイズニー・ランド」で行けというわけで、最近、スハルト夫人がキモいりとなって「ミニ・インドネシア」なるものが計画された。「デイズニー・ランド」まがいのものをつくって「インドネシアの栄光」を世に示そうとしたものらしいが（「インドネシアの栄光」というよりは「スハルトの栄光」だろう）、反対の動きが起ると、いち早く中心人物の若い評論家のブディマンなどを牢屋にぶち込んだ。

「どうして、そんなアホらしいものをつくろうとしたのかね。」

私が訊ねると、ブディマンの友人の大学教師がそくぎに答えた。

「権力者は建物が好きなんだよ。それで、ワイフのほうは感化を受けて、彼女のほうは『デイズニー・ランド』に感動する。」

それから、彼はいたずらっぽく私を見てつけ加えた。

「日本だって、万国博というやつをやったじゃないか。あれも『デイズニー・ランド』だな、未来の。」
何かと言えばガイセン門をおつたて、シャンゼリゼをつくり、ついでのことに「デイズニー・ランド」までつくり出すのは「発展途上の国」が大国ぶりたい、大国に自分をなぞらえたいということだろう。「発展」とは、すなわち、そういうことだという暗黙の了解めいたものがこれまでずっとあつたように思う。「発展途上の国」の小国がそう考えれば、「建物先進国」の大国のほうでもそういうのとをとらえ、その暗黙の了解においては、権力者も人びとも変りはない。それが、これまでのところの世界のありようだった。

インドネシアがそのよい例なのにちがいない。スカルノがしたことは、実際にも、また、比喩としても、ガイセン門をたて、シャンゼリゼをつくることだった。つまり、大国のそれをそのままなぞらえる大きく派手な身ぶりで、それまでの長い歴史のあいだに「建物先進国」の大国によって自分勝手にかたちづくられて来た状況のなかに切り込んで行くこと——私は、その彼のやり方がすべてまちがっていたと言うのではない。いや、それは必要なことだったのかも知れない。さつき述べたブディマンは最初は反スカルノの運動に加わって、実際にスカルノの政権を倒すことに力をつくした人間だが、自分はスカルノの業績のすべてを否定するつもりはない、スカルノの偉大を十分に認めた上で反スカルノの態度をとつたと彼の立場をあきらかにしたあとで、スカルノはすくなくともインドネシア人の劣等感を一掃してくれた、それだけでも、彼は尊敬に値するし、あの大きく派手な身ぶりに意味があつたのだと私に言ったことがあつた。

そして、スカルノがその大国ぶりの大きく派手な身ぶり、**「建物先進国」**の大国の手前勝手な状況のなかに切り込んで行ったとき、大国のほうでもそうした切り込み方を許し、それによって状況がいくぶんでもゆるがされるようなところにそのありようがあったのではないかという気がする。それは、ひとつには、ガイセン門をもち、シャンゼリゼの存在を誇る大国が**「第三世界」**という思いもかけぬ地域に新しく出現して来たガイセン門とシャンゼリゼに対してどのように対処すればいいのか、まだ十分に手だてができていなかったということだったにちがいない。そこへもつて来て、おそらくアメリカ合州国という強大無比な大国の場合を除けば、どの大国のガイセン門もシャンゼリゼも長いいくさのあとで傷つき、汚れ、色あせていて、新しい**「第三世界」**のガイセン門とシャンゼリゼの出現のまえにゆらいでいたのだろう。それほど、大国は弱っていて、本来はきわめてもろくて、見かけ倒しの**「第三世界」**のガイセン門、シャンゼリゼでさえが強大で、光り輝くものに見えたにちがいない。たとえば、そのころ、日本のガイセン門、シャンゼリゼはいちめんの瓦礫に帰し去っていた。

スカルノの意図したことは、彼の新しいガイセン門、シャンゼリゼをふりかざすことで、そうした新しいガイセン門、シャンゼリゼに見あう新しい状況を世界につくり出すことだったのだろう。スカルノばかりではなかった。アフリカでエンクルマが意図し、インドでネルーが意図したことは、まさにそうしたことでなかったかと思う。あるいは、文化大革命以前の中国が意図したことも、いくぶんでもそうしたところがあったように思う。逆に言えば、まさにそれゆえにこそ文化大革命が必要だった——そんなふうに言えなくもない。

しかし、古い大国のガイセン門、シャンゼリゼは大国ぶった新しいガイセン門、シャンゼリゼに

よって根本のところゆらぎはしなかった。それどころか、前者がいくさの痛手から回復するにつれて、ゆらぎ始めたのは後者だった。

あとはくどくど述べてたてるまでもないことだろう。ネルーが死に、エンクルマが没落し、新植民地主義が「第三世界」の支配をふたたび始め、わが日本国とのかかわりあいから言えば、いつのまにか、「日本帝国主義」ということばが決して誇張でないことばとして用い始められる——そこまでこのありようが来たところで、インドネシアについて言えば、スカルノが倒れ、スハルトが彼にとつてかわる。

と言つても、新しい状況がそこで始まったというわけではない。ガイセン門とシャンゼリゼは手つかずのまま残されていて、スハルトのしたことは、あるいは、しようとしていることはそこに「デイズニー・ランド」をつけ加えることだろう。スカルノがめざしたものがひとつの「政治大国」であったとすれば、スハルトのそれは「経済大国」なのにながさない。ジャカルタで最近私がつた新聞記者は「われわれは政府を変えた。しかし、同じことだった」と言った。べつに悲壮がりもせず、笑いながらそう冗談めかして言ったのだが、そのことばはかえって私の耳に重くひびいた。

つづきは製品版でお読みください。